



ふるさとで弾くピアノ

その2

「ピアノ開き」 青柳いづみこ(ピアニスト・文筆家)

休みになるたびに母方の田舎(兵庫県養父市八鹿町)に帰っていたころ、地元の小学校や中学校で演奏する機会をいただいた。

祖母が教育委員をつとめていた関係で、校長先生や学校関係者の方々から声がかかったものと思われる。

小学校は我が家から歩いて二、三分のところにあるが、中学校は円山川を隔てた向こう岸に建っている。そのころは橋がなく、何と板にドラム缶をくくりつけた筏で渡って



明治末ごろの青柳さんの母方の実家

いた。祖母と親しかった名物校長先生の発案によるものだという。

中学校でピアノを弾いたのは、自分自身はまだ小学生のころだった。学校に着き、控室で待っていると、校内アナウンスで「これから青柳いづみこさんのピアノ弾奏があります」と流れ、その「弾奏」という古めかしい表現に感じたこそばゆい思いを今でもおぼえている。

聴いてくれた子供たちに、私のことはどんなふうに映っただろう。そのころはまだ「ピアニスト」を目指して真剣にけいこしていた時期だった。大人にもタメ口をきくかなり生意気なガキでもあった。当時の中学生にとってはおそらく雲の上の存在の校長先生の質問に、友達乗りで答える小学生は、きっとあんまりよい印象を残さなかつたにちがいない。

かんじんの演奏曲目は何を弾いたか、きれいさっぱり忘ってしまった。

演奏の中身をよくおぼえているのは、地元から少し離れた小学校のピアノ開きに招かれたときのことだ。

当時私はもう芸大生で、ビーズのついた赤いドレスを着て、でも足元はスリッパのままでベートーヴェンの『熱情ソナタ』を弾いた。通常のピアノ開きは、たぶんもう少し短い曲を選曲するものだろうが、演奏時間二十分を超える中期の大作を、生徒たちはおとなしく聴いていてくれた。

夏休み中か、少なくとも夏休みに近い暑い日だった。教室で使う木の椅子を体育館に持ち込んで座っていた彼らの白いシャツとはだしの足がいまも網膜に焼きついている。

ところで、ピアノ開きと言うからには、当然楽器は新品である。とくにリハーサルの時間をもうけていただいたという記憶もない。今なら、やれ調律がどうの、フェルトが固いの、一時間は弾き込みをしなければ…などといろいろ文句をつけるところだが、まっさらのピアノでいきなり『熱情ソナタ』を弾いてしまったあのころがなつかしい。

青柳いづみこ ピアニスト・文筆家。CDに『ドビュッシーの時間』『天使のピアノ』(いずれもカメラータ)。著書『翼のはえた指』(白水社)で吉田秀和賞、「青柳瑞穂の生涯」(平凡社ライブラリー)で日本エッセイストクラブ賞。2009年刊の『6本指のゴルベルク』(岩波書店)にて講談社エッセイ賞。近著に『指先から感じるドビュッシー』(春秋社)。大阪音楽大学教授、青山学院大学講師。日本ショパン協会理事。オフィシャルHP: <http://ondine-i.net>